

在宅医療について感じること

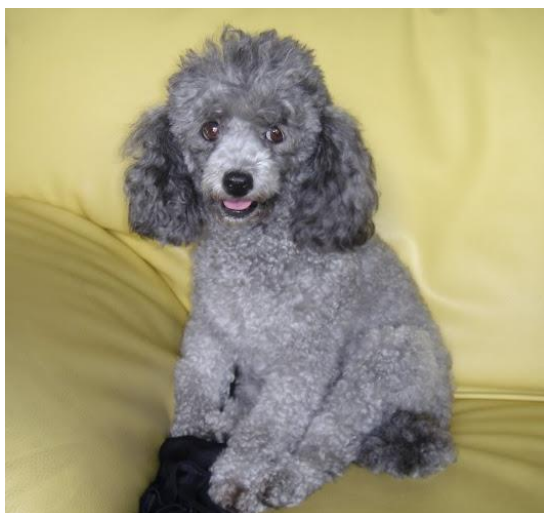
久しぶりに、妻と二人の娘もそろって家族4人で車に乗っていると、「あなたに会えてほんとうによかった 嬉しくて 嬉しくて 言葉にできない」。小田和正の「言葉にできない」が流れていました。悲しげな曲に家族4人の涙が止まりません。前日に亡くなった愛犬ぴぴちゃんの火葬に向かう車の中での出来事です。

わが家には、トイプードル3姉妹がおりました。過去形なのは、平成25年9月に二女のココちゃんが、そして平成26年1月24日に長女のぴぴちゃんが相次いで亡くなったからです。ココちゃんは具合が悪くなってわずか3日、そしてぴぴちゃんは約3か月。二匹の愛犬の死に直面し、自宅での看取りを通じて家族の絆、在宅医療・介護について感じるがありました。

『死』は生きているものにとって避けては通れないものですが、それには2種類ある様に思われます。「若くしての突然の死」と「天寿を全うする死」ココちゃんの死が前者で、ぴぴちゃんの死が後者でありました。どちらの死も残された家族にとってには悲しみをもたらすものですが、愛犬二匹の死を短期間に経験した今回、自分が今後、在宅医療に関わっていく上でとても大切な事を教わった様な気がします。

ココちゃんが亡くなって1か月程たった時の気持ちと、ぴぴちゃんが亡くなって間もない今の心境をそれぞれ綴ってみたいと思います。

ココちゃんが教えてくれた事



平成25年9月22日(日)午後6時9分、愛するココちゃんが天国に召されました。最近、元気がなくなってきて食欲もなくなってきたけど、ちょっとスマートになって良かったかな。なんて呑気な気持ちでしたが、水分も摂らずにもどし出した

ため、点滴でもしてもらったら元気になるかなという軽い気持ちで、9月20日（金）の朝に獣医さんに連れて行きました。診断は、末期の腎不全。いつ亡くなくても不思議ではないという事で緊急入院となりましたが、病態はとても悪く、夕方には在宅で看取ることを勧められました。気持ちの整理がつかないまま、取りあえず出来る限りの治療をお願いしました。翌21日（土）の午後には少し脱水も回復し、何とか元気になってくれないかという気持ちと、冷静に検査データをみれば回復は困難かなという複雑な気持ちで途方に暮れておりました。病院に面会に行った後に獣医の先生に連れて行かれるココちゃんの悲しそうな目が瞼から離れませんでした。22日（日）朝のココちゃんは、前日とは違って変って苦しそう、ICUに収容されて悲しそうにこちらをみてきます。ココちゃんが望んでいることは何かという事は明白で、獣医の先生の勧めもあり、自宅に連れて帰る事にしました。自宅に帰ってから天国に召されるまでわずか6時間。その間、ココちゃんは苦しい息をしながらもじっと家族全員を見渡し、何かを訴える目で見てきます。亡くなる直前には、必死で立ち上がって一人ずつを順番にみて最後のお別れをしています。ココちゃん。もういいよ。十分頑張った。ゆっくり休んでいいよ。最後は、パパに抱かれながらママの目をじっと見つめて天国に召されました。一緒にいた長女は号泣！前日に名古屋から時間をつくって会いに来た二女は、丁度東京での友達の結婚式に出席していましたが、LINEでの連絡をみて号泣！友達の結婚式で感極まって、とても優しい人と思われたことでしょう。

我が家では、クリニックを開業した1997年にぴぴちゃんが来てから、2000年にココちゃん、2005年に萌華ちゃんと、トイプードル3姉妹がおりました。開業後16年間、娘二人が大学に進学して家から出ていなくなっても、常に一緒に暮らしてきたトイプードル3姉妹。前年に父親が亡くなった際には悲しくても涙は出てきませんでした。ココちゃんが助からないと悟った時には、人目を憚らず嗚咽を抑えることが出来ませんでした。天国に召された時はもちろん、その後数日は涙が出て止まらず、両目を腫らして診療しておりました。ココちゃんがいなくなって10日。少しずつ気持ちの整理が出来てくると同時に、ぴぴちゃん、萌華ちゃんの様子を冷静に観察していると、この子達3姉妹にもそれぞれ社会が出来ていたのだなと、つくづく感じられるようになってきました。ココちゃんに教えられた事を綴ってみたいと思います。

11年前、ココちゃんが誕生して1年程経った頃、ペットについての自分の思いをホームページに載せていました。その時の文章を転記させていただきます。

動物好きは父親譲り？！

子どもの頃、父親が動物好きであったため、犬や猫をよくペットとして飼っていました。秋田犬などの大型犬が多く、怖くて家に入れず、犬が横を向くのを待ってすり抜けて玄関を駆け抜けていたため、単に番犬ぐらいにしか思っていないませんでした。猫には引っ掻かれた印象しかなく、仕返しに‘キャット空中三回転’が出来るか階段の上から落としたりし、さらに引っ掻かれるといった具合でした。室内犬としてポメラニアンを飼った事がありました。父親にはばかり懐き、そこらじゅうに抜け毛がくっつくため、‘汚い奴！’としか思っていないませんでした。

11年前、県立志摩病院に勤務していた頃、雑種の子犬を知り合いから譲り受けて飼ったことがありましたが、当時1歳半の次女が怖がり、大泣きして家中の鍵を掛けまくって部屋に閉じこもってしまったため、1週間で里帰りとなりました。

時は流れて5年前、ひよんな事で黒と白の2匹のトイプードルの赤ちゃんが我が家にやって来ました。まるでぬいぐるみのようであり、子ども達が可愛がっていましたが、部屋の中でおしっこやウンチをするは、うるさく鳴くは、寝ている時のみ可愛いぐらいでした。数か月がたち、少しづつ人も犬もお互いが慣れてきた頃、「どこかの子どもその後を追いかけて歩いていた。」という目撃情報を最後に、白い方が突然失踪してしまいました。その時の家族の悲しさといったら、まるで子どもが誘拐された気分であり、それまで私は鬱陶しく思っていたら、まるで子どもが誘拐された気分であり、それまで私は鬱陶しく思っていたら、あまり可愛がってこなかった事が悔やまれ、急にペットに対する愛着が湧いてきました。犬は、可愛がってくれる人にはとても懐いてくるもので、家に帰った時には誰よりも早く出迎えてくれるは、食事の時にはおねだりするは、出かける時は悲しそうに眺めて鳴くは、夜になれば早く寝に行こうと誘いに来るは、

遅くまで起きていると傍でじっと待っていてくれるは、まるで小さい子どもの様です。もちろん寝る時も一緒。

1年前には新たにグレーのトイプードルも家族に加わりました。末っ子のためわがままでヤンチャですが、上の子とは違った可愛さがあります。人それぞれといいます、犬それぞれの性格の違いがとても面白いです。

2匹の娘達をみていると、まるで2人の娘達が小さかった頃にいつも傍にくっついて懐いていた事を思い出します。よく、「子どもがいない人にとってはペットが子どものようだ」といいますが、「ペットは、子どもが一番可愛い時のままでいつまでもいてくれるような存在」だと思います。

最近になって思うことは、子どもの頃に父親がよく犬や猫を飼っていたのは、3人の息子があまり懐かなくロクに話もしなかったためかも知れません。単に動物好きだったのではなく、本当は子ども達が離れて行って寂しかったのかも知れません。

2002.3.1

その後、2005年には3姉妹の末っ子も加わり、一家団欒の日々が数年続きました。末っ子の萌華ちゃんは、事あるごとにココちゃんに対抗していましたが、長女のびびちゃんに対しては一目置いていたようで、びびちゃんが高齢になり弱ってきてても、突っかかる事はありません。長女のびびちゃんは、白内障で目がほとんど見え、最近では耳も聞こえなくなって完全に介護が必要な状態です。常に寝てばかりですが、寝顔は小さい子どもそのもの。ペットは、身体は衰えても精神は自分たちが面倒を見てやらなければいけない3~5



歳のままなのですから。ココちゃんは、一番の寂しがり屋さんでした。常にママの後を追いかけて、「ストーカーココ！」と言われておりました。ママがお風呂に入っていればお風呂の外で待っている。トイレには一緒に入ってくる。外出して留守番している時は、じっと玄関で待っている。まさに「忠犬ココ！」。もっとも犬らしく振舞っておりました。二女はぴぴちゃんと萌華ちゃんは大丈夫でしたが、ココちゃんを抱っこすれば喘息発作が起こるため、「アレルギーココ！」の異名をもっておりました。ココちゃんがいるため、二女は実家に帰ってきててもウルトラマンほどではないにしても、2時間程で全身搔痒感に襲われて帰っていくといった具合でした。そういえば、ココちゃんが天国に召される前日に見舞いに来た時も、抱っこして喘息発作に襲われていました。末っ子の萌華ちゃんは、自由奔放、わがまま三昧！ぴぴちゃんには突っかからないけれども、ココちゃんには突っかかる。常に自分の方が偉いとばかりにやりたい放題。それを無視してココちゃんは渦高く積まれた洗濯物の上に乗って昼寝したり、狭い箱や、カバンの中に入ってじっとママを見つめていました。

ココちゃんがいなくなってもぴぴちゃんはマイペース。でも、萌華ちゃんの様子がおかしい。ぴぴちゃんが寝てばかりなので、昼間は一人で留守番する事になってしまい、とても寂しそう。やんちゃな萌華ちゃんが姿を消し、これまでココちゃんがいるところに押しのけて自分が行っていたのに、ココちゃんがよくいた場所にはいかなくなり、生気が抜けてしまっています。私たちが悲しんでいる以上に、この子も悲しんでいるのかと思うと、とても可哀そうでなりません。人でも犬でも、やはり3人以上の社会を持つことの必要性を再認識いたしました。

入院した当日は、ココちゃんがいなくなってしまうことを受け入れることが出来ませんでした。しかし、2日間の治療が救命という結果には至りませんでした。この2日間の延命治療が家族にとっては愛するココちゃんの「死」を受け入れるためには必要な2日間であったと思われまます。「死」を覚悟した時には、ココちゃんと家族にとって何が一番大切で必要な事かは明白でした。たとえ数時間でも家族で最期の時間を共有出来たという事は、ココちゃんが私たちに与えてくれた貴重な時間であったと思われまます。

ココちゃんの火葬も終え、お世話になった獣医の先生にお礼に伺った際に思わず出た言葉が、『先生の2日間の延命治療のお蔭で、突然襲ってきた愛する家族の「死」を受け入れるための気持ちの整理が出来、最期を自宅で家族と共に看取ることが出来ました。今後の自分自身の診療においても、在宅医療を積極的に行っていかなければならない理由と意義を教えてくださいました。有難うございました。』。

ココちゃんが教えてくれた事を忘れずに、今後積極的に在宅医療にやりがいをもって取り組んでいきたいと思っております。

ココちゃんとの12年間、感謝の気持ちでいっぱいです。

追記：

11年前に書いた文章を改めて読み返してみると、

「ペットは、子どもが一番可愛い時のままでいつまでもいてくれるような存在」と書いていました。

今もその気持ちは変わりませんが、それに加えて思う事は、ペットがいなくなってこれ程悲しいのは、『ペットは、幾つになっても飼い主に対して全幅の信頼を持ってすべてに対して依存してくれている存在』だったからだと思います。飼い主の方も、生活の大半をペットに依存している相思相愛の関係がずっと続いていたのですから。。。

ココちゃんへ

ココちゃんがいなくなってから1か月が経とうとしています。ココちゃんの事を思うと泣けてくるので、泣くのはお風呂の中だけにしようと思っています。ママは一人になるといつもそばにいたココちゃんの事を思い出して泣いています。ココちゃんと同じ誕生日のHさんも夜中に人知れず思い出して泣いている様です。Aさんはママの事を気遣ってあれから2回家に帰って来ました。カラ

ータイマーが2時間を過ぎても鳴らない事が、ココちゃんがいなくなった事を再認識させて寂しいです。ぴぴちゃんは寒くなって風邪をひいていますが、獣医さんに早めにみてもらって元気にしています。萌華ちゃんは、最近ココちゃんがしていた様に前足をクロスさせて座ったり、ママを追いかけてストーカーをしています。時々萌華ちゃんに乗り移っていませんか？

天国から、ココちゃんが愛し愛された家族をいつまでも眺めていて下さいね。

いつかまた会える日まで。。

ぴぴちゃんの思いで

1年ほど前から、2階の寝室に登って行くのが難しくなってきたぴぴちゃん。それまでは、他の2匹が階段を左右の手足を同時に出して駆け上るのとは違い、四足を交互に出してヒョコヒョコ歩くように登っていたのに。

クリニックを開業した時からずっと一緒にいるぴぴちゃん。医師としての第二の人生を歩みだしてからずっと一緒でしたね。胡坐を組んだパパの足の上でいつも寝ていましたね。一人夜遅く1階で仕事をしていると、他の2匹が2階の寝室にママと行っても、じっと待っていてくれましたね。他の2匹がしょっちゅう家の外へ脱走して大騒ぎになっていましたが、ぴぴちゃんは家が大好き。ある日、ぴぴちゃんを庭に出したのを忘れて出かけた際、帰って来た時に玄関先でじっと待っていてくれましたね。真夏の暑い日に、庭に置き去りにして熱中症になりかけた時もありましたね。そういえば、その日からいつもぴぴちゃんは庭に穴を掘って涼むようになりましたね。人の言葉を一番理解していたのもぴぴちゃんでした。自分のしてほしい事を頼む際、人を顎で指図したりもしていましたね。臭いものが嫌いで、匂いを嗅ぐと鼻をフンッと鳴らして嫌がっていましたね。赤ちゃん抱っこ、お姫様抱っこが大好きだったぴぴちゃん。他の2匹も一目置いていた人間味溢れるぴぴちゃん。

白内障で目が見えなくなっても16年間住み慣れた家の中を器用に歩き回っていましたが、ココちゃんが亡くなって1か月ほどして、歯茎から感染して

蓄膿になってから急に食欲がなくなり、腎不全になってしまいました。5日間程の入院加療で急性期を乗り切った後は、ぴぴちゃんの大好きな自宅での療養が始まりました。注射器を使ってのミルク、ペースト状の食事の介助、連日の皮下点滴、腎性貧血に対してのエリスロポイエチン製剤の注射等、獣医さんの教えを頂きながらの在宅医療がスタートしました。それまで、皮下点滴は点滴を失敗して腫らしてしまった時しか経験がありませんでしたが、獣医さんから娘のHさんがやり方を教えて頂き、それをまた自分が教わったという次第です。悪いなりに落ち着いた状態が1か月程続いていた時には、この様な状態がずっと続くものと信じていましたし、ささやかな幸せにも感じておりました。まるで、堀辰雄の「風たちぬ」の主人公が、妻 節子のサナトリウムでの療養中に感じた、「こんなささやかなものだけで私たちがこれほどまで満足していられるのは、ただ私がそれをこの女と共にしているからなのだ、と云うことを私は確信していられた。」の心境に至っていた様に思われます。

その後の1か月は認知症が進行し、家の中も場所が分からず徘徊してとても可哀そうで見られていません。赤ちゃんの時に使用していたサークルをひっぱり出してきて、そこでの生活を余儀なくされました。サークル内でクルクル回っているぴぴちゃんを見ていると居た堪れなくなりますが、抱っこをしてあげると以前と同じように安心して寝ていきます。

ぴぴちゃん！亡くなる前の日の夜もパパの膝で安心して寝ていましたね。でも、遂にお別れの時が来てしまいました。

パパは、一人1階で仕事をしている時に、ぴぴちゃんを思い出して泣いています。沢山の思い出を本当にありがとう！安らかに眠って下さい。もう、苦しまなくてもよくなったからね。

コタツでみかん

最近新聞で、「コタツ」と「みかん」の売上が落ちているという記事を読みました。生活様式の変化により、コタツでみかんを食べるといふ昔ながらの日本の冬の家庭生活がなくなってきた様です。わが家でも、20年ほど前からコタツを使わなくなっておりましたが、ぴぴちゃんをサークルに入れ、その傍らで家

族一緒に生活するためにコタツを購入。おのずとみかんを食べています。いつも自分の部屋にいたHさんもコタツにいるようになり、家族がコタツを囲んで一緒にいる時間が増えたのも、ぴぴちゃんのお蔭です。

在宅医療・介護は、家族に無理な負担を強いるものであってはなりません。そこには、在宅での看取りまでの期間を通じて、思いで作りのお手伝いをし、残された家族の絆を深められる事の意義がある様に思われます。無理なく在宅でみる事の出来る範囲の治療に心掛けるべきではないでしょうか。これまで先輩諸先生方が行ってみえた、長年診てきた顔なじみの患者への往診という形が、理想の在宅医療の姿に思えてなりません。

2020年、団塊の世代が後期高齢者になる年に向けて国を挙げての在宅医療推進が推し進められております。住み慣れた家で最期まで過ごす事が理想との事ですが、一人暮らしの方にそれを適応する事にどれ程の意味があるのか疑問です。多死社会において死する場所が病院だけでは追いつかない。老健施設も足りない。死に場所を確保するためにサービス付き高齢者住宅を増やして在宅とするのは、家族がみることが出来ない現状を考えれば決して間違った施策ではないと思いますが、今回、愛犬の看取りを通じて感じた在宅医療の本質とは少しかけ離れている様に思われます。在宅で死を迎えるという事、家族に看取られるという事の意義をもう少し考えていかなければなりません。

親子の間には年齢的に二回りの違いがあります。自分と自分の親。その間の世代が団塊の世代。自分より一回り下の世代が今後団塊の世代の親達を看取るためには、サービス付き高齢者住宅を増やす以外に道はないのかもしれませんが、2020年以降の、自分たちが看取られる時代に理想の在宅医療を確立するためには、自分たちの子どもと、これから生まれてくる孫の世代に、かつて日本に存在した家族の絆の大切さを伝承していかなければなりません。

そのための第一歩は、『コタツでみかん！』

ただし、冬場乾燥した部屋であまり絆を深めすぎて、インフルエンザやノロウイルスに感染しない様に気をつけて下さいね。。。

石田 亘宏